PR

神戸新聞社×紀伊民報
防災に挑む!!
学びの探究アドベンチャー

「防災」テーマに探究ワークショップ

神戸・和歌山をつなぎ開催　中高生や教員約40人が参加

「地震」というキーワードでつながった兵庫県と和歌山県。紀伊民報、和歌山県情報化推進協議会（WIDA）、omochi、ベネッセコーポレーション、神戸新聞社が連携し、「防災」をテーマとした探究ワークショップを行った。阪神・淡路大震災から30年となる神戸、南海トラフ巨大地震に備える和歌山から、プレ・当日の約40人が参加した。防災に関心の高い中高生や教員らが集まり、データや情報の扱いなど探究学習で必要とされる力を養い、地域や世代を超え、一緒に問い学ぶ時間となった。兵庫は神戸新聞社会議室で、和歌山県は串本古座高校を会場とし、双方をオンラインでつないだ。

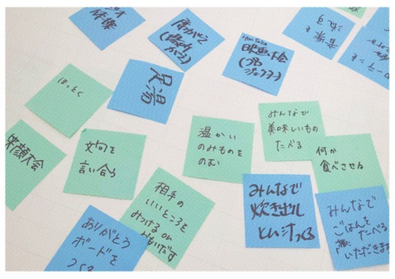
神戸会場
ワークショップの様子

紀伊民報取締役制作部長 長瀬稚春さんのあいさつで開会。神戸が阪神・淡路大震災発生30年を迎え、和歌山は24年12月で昭和南海地震から78年が過ぎ、南海トラフ巨大地震の発生確率が高まることに触れ、「震災の記憶が薄れていく中、24年8月には『南海トラフ地震臨時情報』が出て防災への思いを新たにしました」と地元紙としての思いを話した。

阪神・淡路当時、取材に当たった、神戸新聞NIE・NIB推進部の三好は講演で「震災を知らない世代こそ震災を語るべき。記憶のバトンをつなぎたい」と強調。30年前、コンピューターシステムがダウンした神戸新聞社が、京都新聞社の全面協力で新聞発行にこぎ着けるまでを振り返り、災害文化の継承など震災から得た教訓を語った。南海トラフ巨大地震を前に「備えにゴールはない」と力を込めた。

神戸会場の高校2年生は「実際に災害経験がないと現地の様子が分からず、知る機会も少ない。思っていたよりも知らないことが多く、テレビやSNSで見ている情報はほんの一握りだと気づき

地域や世代超え、問い学ぶ



もっと知りたくなりました。」

続いて（同）楽しい学校コンサルタントSecond代表、前田健志先生の「違いを楽しむ。問いづくりを楽しむ」ワークショップを行った。ワークは見え方の違い、考え方や背景の違いを知るために「問う」から始まった。

ことばや、ことば以外の印象も含めたコミュニケーションの役割を学びながら、街中や被災地で生じた事例で問いを設計するワークもあった。

「被災から数日後、避難所でストレスが増す場でどうすればよいのか、どのように落ち着けばいいのかという問いに興味を持った」と西田さん（中2）。また、「一つのテーマに対して、どのようにテーマを広げればよいのかという、問いの方法を知ることができた」と伝えてくれた。

減災復興学のフォーラムをきっかけに本イベントに参加した中村さん（高2）は「他の人の感じていることや考えていることは全く想像できないが、話しあったり表現することで『伝わる、共有できる』のだと実感した」と、違いを認めるからこそのコミュニケーションが大事だと強調。ほかの参加者（高2）らは「学校でもこのようなワークショップをするが、大人と交流できたのが新鮮。同じ問いでもみんな意見がバラバラで、いろんな視点から物事を見ていて、自分が思いつかなかった考えが出てきて楽しかったです」と違いを楽しむ意見もあった。

12月21日にオンラインでプレイベントを実施。講師は（株）omochiの土井仁吾さん。食を通じて自分の価値観を知り、被災後の生活を想像する問いに取り組んだ。

試験勉強や仕事などの日常生活で心や身体の疲れをいやす食べ物は何か。リンゴやラーメン、黄金糖など自身の力となる食べ物が披露された。

ときに突然の被災で自分の身体や心の健康を保ち続けられるのか。自宅避難か避難所生活の場合か、被災後数日で身体に必要な栄養をとることと、被災数カ月たち、心の栄養をどう取るか考えた。

土井 仁吾さん
株式会社omochi代表
（北海道・札幌出身）

参加した高校生は「好きな食べ物のどんな点を気にいっているのかが分かると、代わりの食べ物を作れるかもしれないと初めて知った。災害時の避難所生活についてもっと深く知りたい」と。

自分の食べたいもの、好きなものを端に、被災状況をイメージする過程で、問の立て方を学ぶ（21日、オンラインにて実施）

神戸新聞の記者から阪神・淡路大震災などについて聞く参加者ら（26日、串本町串本で）

神戸からの中継聞き入る

和歌山の高校生15人ら

和歌山県串本町の和歌山会場には県立串本古座高校、田辺高校、神島高校の生徒15人が参加。神戸新聞社からオンラインで中継される阪神・淡路大震災の講演に聴き入りました。

串本町は南海トラフ巨大地震の想定震源断層域に近く、巨大地震が発生すれば約3分で津波が押し寄せると想定されています。生徒らは、震災で倒壊した建物や火災の様子見たり、当時の状況を伝えるラジオ放送を聞いたりして、防災への思いを新たにしていました。

探究ワークショップは、教員や保護者ら5人が加わり、計20人が5グループに分かれて行いました。直径約90㌢の段ボールを膝に載せてテーブルにし、自分の好きなことを付箋に書き出して他の参加者と共通する趣味を見つけたり、違いを知ったりするワークを体験しました。

神戸会場の参加者らと意見交換する串本会場の参加者

和歌山会場生徒コメント

串本古座高校1年生　雑賀 望さん（16歳）

阪神・淡路大震災のことを写真で見たことがあったが、講演を通してより深く考える機会になった。

ワークショップでは価値観の違う人と共通点や相違点を見つけ、さらにそれらを深めるというのがとても楽しく、いい機会になった。災害に対しての意識も変わった。これまでは災害について考えたことはあったが、例えば災害後に避難生活を体育館などで過ごす際の他者とのコミュニケーションなど「乗り切った後」については考えたこともなく、そんな対策をも考えなければならないと思った。

串本古座高校2年生　丹野 悠飛さん（16歳）

講演では、初めて見る阪神・淡路大震災の写真も多くあり、さらに実際に震災を目の当たりにした方から話を聞くことで当時の現状をより鮮明に知ることができた。また、それがとても恐ろしく感じた。

グループワークは難しかったが、価値観が全然違う人としゃべる点では、災害時の避難生活と同じようなものにも思えた。また、クラスメートではなく他校の方たちとのワークというのも新鮮でよかった。

今回は二つの会場をつなぎ、同時進行するイベントだったが、今後もこういったイベントがあれば、他会場の生徒や先生ともっとコミュニケーションを取れたらうれしい。

前田健志さんコメント

本日のワークショップでは、短い時間にアイデアを出したり、他のメンバーとの違いを楽しんだりしてもらいました。「探究」は人が生きていくことそのもの。災害時に限らず、普段から考え続けることがよりよい社会づくりにつながると思います。

前田 健志さん
合同会社楽しい学校
コンサルタントSecond
代表（石川県・金沢在住）

読者アンケート

本ページの特集について感想をお聞かせください。神戸新聞でアンケート集約し、紀伊民報と結果共有をし、踏まえ今後の企画の参考とします。

QRまたははがき、手紙、FAXで。650-8571（住所不要）神戸新聞社メディアビジネス局営業部、防災アドベンチャー担当まで。FAXは078-361-7802。

協賛企業　防災に挑む!!　学びの探究アドベンチャー

協賛企業の紹介は特設サイトから。
和歌山県の企業は、日本の食文化や地域経済を支える取り組みを、兵庫県の企業は被災当時のエピソードやBCPの考え方、防災食レシピなども。ぜひご一読ください。

《兵庫県》
KOBE HARBORLAND
味の感動を伝える―。エム・シーシー食品 MCC
TANAKA KANESUKE SHOTEN STEEL SHANK
e431 しざい ネットでかんたんe資材
泉平 izuhei

《和歌山県》
株式会社 山長商店
UMEYOSHI 紀州梅干 千里庵
中田食品
QualitySoft
FUKUHARA 福原ニードル株式会社
INNOVATION SPRINGS
人を想う時間をつくる。なかた
KANASE Since 1919 株式会社カナセ Kanase Inc.

主催：omochi、紀伊民報、神戸新聞社、和歌山県情報化推進協議会　協力：（株）ベネッセコーポレーション　後援：神戸市、こどもの創造的学び推進実行委員会、和歌山県教育委員会（五十音順）